

# 『最後の晩餐』におけるイエスの奉獻賛歌

## ——キリスト教の賛歌の起源——

横 手 多佳子\*

### はじめに

今日、日本のプロテスタント教会の礼拝で、どのような教会音楽が用いられているかを考えてみる時、それは大変多様化している。あらゆるジャンルの音楽と様々な言葉の言いまわしが盛り込まれている。確かに表現の自由はあるにしても、今あらためて教会の讚美歌の起源を歴史的に検証することにより、神への賛美のあり方を問い直したいと願う。そのことにより、教会音楽は今後どうあらねばならないかを示され、さらに、礼拝に訪れる者たちが、どの時代にあっても生き生きとした神への賛美をなすことへと導かれ、変えられ、成長し、次の世代に神賛美を受け渡して行きたいと願うからである。

### 序 論

教父アウグスティヌスは、『告白録』の中で、神が人間を創造した目的は、被造物としての人間が神を賛美することにある、と記している。人間が神

---

\* 金城学院大学礼拝オルガニスト・金城学院大学オルガニスト養成講座講師

を讃えるべく創造された存在であるとすれば、神への賛歌は被造物としての人間の、最も美しい神への献げ物である。詩篇81編2-3節では、神賛美が掟であり、神が命じられた定めであると告げて、次のようにすすめる。

わたしたちの力の神に向かって喜び歌い  
ヤコブの神に向かって喜びの叫びをあげよ。  
ほめ歌を高くうたい、太鼓を打ち鳴らし  
琴と豎琴を美しく奏でよ。  
角笛を吹き鳴らせ

神が求める神賛美に寄せる人間の思いが、最も美しい表現となって結集したものが、キリスト教の「讃美歌」である。この讃美歌はイスラエル民族の歴史の中で生まれ、ある時代には旧約聖書のモーセ五書のモーセやミリアムの祈りのことばの中に組み込まれ、詩篇となり、預言者の言葉の中に溶け込み、哀歌となって、さらには、ユダヤ教の礼拝の中で歌われ続けて来た。そしてこれは時代を超えて受け継がれてきた。新約聖書の時代に入ってから、イエスから使徒たちへと、賛美をすることが継承され、例えば、使徒パウロが獄中でシラスと共に讃美歌を歌ったことによる人々への大きな影響力も記録されているのである<sup>1</sup>。その使徒パウロがフィリピの教会に宛てて書いたフィリピの信徒への手紙の2章6節から8節は<sup>2</sup>、当時の教会でのキリスト賛歌だった、ということが知られている。この数行の句は、キリスト・イエスの「ケノーシス」、すなわち、キリストの謙り（ケノーシス）と奉仕（ディアコニア）を歌っている。

教会史の中で原始教会から初代教会へと移る過程において、讃美歌はすでに礼拝の中で絶対になくってはならない要素だった。起源300年代の 아우グスティヌスの時代には、讃美歌の働きは教会の典礼のみでなく、信徒の日々の生活の中でも、さらに重要なものとなっていたのである。アウグス

ティヌスは『告白録』第六章で「わたしはあなたの讚美歌と聖歌を聴き、あなたの教会で甘く響く声に感動し、どんなに涙を流したことでしょう。」<sup>3</sup>と当時のミラノの教会での讚美歌体験を告白している。ここに、アウグスティヌスが書く、「あなた」とはアンブロシウスのことである。

実は、アウグスティヌスの讚美歌体験には当時の三一論をめぐる、アリウス派との教会政治の混乱が反映する。アリウス派のローマ皇帝による弾圧と迫害がアタナシウス派を支持するアンブロシウスに及んだ。彼の母モニカも属していたミラノ教会の人々は、アンブロシウスを援護し、教会に立てこもった。彼らは東方教会の礼拝讚美歌と詩篇を歌って、お互いを支え合ったという。その時の様子はどうであったか、宮谷宣史氏の注解は興味深い。

軍隊に包囲された教会堂の中で不安をかかえている信徒たちを励ますために、司教アンブロシウスは説教したり、またみんなで歌を歌ったりした。彼は自ら讚美歌を作り、東方教会の伝統に従い、みなと共に歌った。それまでも教会では讚美歌は礼拝などで歌われていたが、聖書の言葉（詩篇や讚歌）など、あるいは教理的な歌が主であった。それに対してアンブロシウスは、儀式（礼拝や日課）と教理のためだけでなく、信徒を励ましたり、慰めたりする、音も声も心も一つにして歌う、いわゆる情熱的な歌を作って歌わせた。<sup>4</sup>

典礼という讚美歌本来の「座」をこえて、アンブロシウス<sup>5</sup>の讚美歌が信徒の日常生活の場で、信仰の励ましのために歌われたことは意義深い。今日まで伝わっている『アンブロシウス聖歌』は、ラテン語の単旋律で歌われた典礼聖歌であり、ローマ典礼聖歌と共に、西方教会では最古の現存する聖歌である。東方聖歌、ローマ、ガリア、モサラベ等の聖歌も含んでいるとされる<sup>6</sup>。一方会衆の苦しみや信仰の戦いをテーマとした讚美歌と

して用いられたものの一例を紹介してみよう。それはアリウス、アタナシウス両派の熾烈な勢力争いの中での、殉教者を記念しての讃美歌である。ヴァクトル、ナポル、フェリクス・パイイ (Victor, Napor, Felix pii) という、北アフリカのムーア人兵士はマクシミリアン帝下の軍属であったが、いずれも紀元303年頃殉教した。遺骸はミラノに移送された。アンブロシウスは386年に彼らの記念礼拝堂を建てた。その記念ミサで歌われた讃美歌を彼は作った。次にあげる彼の讃美歌は、上述の状況の折、教会に立てこもる中で、互いの信仰を励ますために、ごく自然にミラノ市民たちによって歌われたと推測される。以下、家入敏光著の『聖アンブロシウスの賛歌』<sup>7</sup>からの引用である。

1 聖なるヴァクトル、ナポル、フェリクス

このミラノの殉教者たちは  
わたしたちへの土地への移民  
ムーア人の客人です

2 最果ての地

わたしたちの名から遠ざけられた  
太陽の灼熱下にあえいでいる  
焼けつく砂地が彼らを贈ってくれました

3 血の高価な報酬で

ポー川は彼らを客人に迎えました  
はぐくむ母なる教会の信仰が  
彼らを聖霊で満たしました

4 そして教会は三人の殉教者の

聖なる血で勝利の栄光を得  
不信仰の異教徒の陣営から引き抜かれた  
キリストの兵士たちを神に供えました

- 5 彼らの労苦は信仰に役立ちました  
諸々の戦争で武器をとつて  
皇帝のために命を危険にさらすこと  
キリストのために受難すべきことを学びました
  
- 6 キリストの兵士たちは  
鉄の剣も武器も求めず  
真の信仰を持っているところの  
武器で防備して進みました
  
- 7 彼ら兵士にとっては、信仰が盾であり  
死は勝利の凱旋式です  
わたしたちをねたんで迫害する専制君、王 [マクシミアヌス] は  
殉教者たちをロデイの町へ送りました
  
- 8 しかし四頭立ての二輪車にさらわれた殉教者たちは  
その体を聖なる生贄として返しました  
皇帝たちの目の前では  
勝利の凱旋車に乗っているように運ばれて行きました<sup>8</sup>

家入敏光氏は同書268頁から269頁の「解説」において、アウグスティヌスの、『告白録 (Confessiones)』を通して、彼がどのようにミラノ大聖堂での典礼を経験し、そこでの賛美にたいしてどのような印象を持ったか

ということを紹介している。それは第九卷七章に見られる。「ミラノの教会においては：……兄弟たちはたいへん熱心に、声と心とをたいせつにして合唱していました。そのとき東方の流儀にしたがって賛美歌と詩編とが歌われるように定められたのですが、それは民が苦難に耐えきれなくなって意気阻喪することのないためでした。この習慣はその時以来、今日にいたるまで保たれ、今では多くの、いやほとんどすべての、あなたに属する信者の群れが、世界の他の地方においても、それに倣っているのです。」

アンブロシウスは、静寂の人ではなかった。彼は、典礼に関しては比較的自由で柔軟な考えの持ち主であり、神学的には幅広く西方ローマ教会の典礼の中に積極的にパレスチナ、ユダヤ、シリア諸教会の要素を採り入れることを実践したと見られる。彼の典礼聖歌は豊かな詩編交唱の唱和 (psalmodia) によって進められた。リズムの点でも、長短、強弱の変化が豊かであり、信仰を生き生きとさせる力をもつ聖歌だった。彼自身も賛歌の作詞作曲に熱心であった。「聖書朗読と共に信徒たちの信仰を励まし支えた。こうしてアンブロシウスは西方ローマ教会の聖歌唱和の改革者、父と呼ばれている。彼に由来する賛歌・典礼聖歌の本質、体系はグレゴリオ聖歌、中世の讃美歌へと発展した。アンブロシウス聖歌 = cantus ambrosianus (ラ)、Ambrosian chant (英) は現在もミラノ教区で歌われている。」<sup>9</sup>

現在のミラノ司教座教会では、通常、ミサの冒頭のみで歌われる「キリエ」を、ミサの途中で何度も取り入れ、司式者が香を指揮者のように振るなど、他の都市では見られないミラノ独自のミサが行なわれている。こうした典礼の様式は、おそらくアンブロシウスの典礼にまで遡及すると推察できる。

典礼讃歌に及ぼした聖アンブロシウスの影響がどれだけ多大なものであったか、それは計り知れないものである。上述のように、アンブロシウスの死後、彼の讃美歌はラテン語で歌われるグレゴリオ聖歌へと受け継がれ、中世の讃美歌へと継承されていった。

本来、賛美は民衆のものであるはずであるが、教会の歴史を見ると、教会の礼拝が典礼化する過程で、それは司祭の独占するものとなり、会衆はただひたすら聴き手として会衆席に着座させられていた時代があった。現在のヨーロッパの教会や、修道院の礼拝堂の造りにそのなごりをみることが出来る。それは会衆席と聖職者席を仕切るために鉄でつくられた、冷たいギッターである。ギッターの内側はホッフアルター (Hochalter) と呼ばれる至聖所にあたる領域であり、そこにコア (Chor = 内陣) といわれる司祭席がある。宗教改革以前、このギッターの向こうの司祭席で、司祭たちだけが典礼聖歌を斉唱する、というような典礼が長く続けられた。そのようにしてクレゴリオ聖歌や典礼聖歌は歌われたのである。

民衆の手に礼拝における神賛美を再び取り戻したのは、宗教改革者たちであった。ドイツ、スイスの宗教改革者たちは例外なく先ず典礼改革に着手し、典礼聖歌の改革に取り組んだ。それはカトリックの典礼聖歌を廃棄し、福音主義信仰に基づく会衆讚美歌を編纂することを意味していた。そのために、宗教改革者たちは多くの時間と努力を犠牲にすることを惜しまなかった。

たとえば、スイス、チューリヒの宗教改革者ウルス・ツヴィングリ<sup>10</sup>、彼は当時の司教座教会であったグロースミュンスターの復活祭深夜ミサに対して、痛烈な批判の一撃を加えたことで知られている。事情はこうであった。深夜のミサで司祭たちだけが歌い興じるラテン語賛歌を、馬鹿騒ぎだと批判したのであった。ツヴィングリがこの司教座都市を宗教改革するにあたって、最初に取り組んだのは、讚美歌改革だった。彼は典礼音楽における、極端なオルガン破壊をやったのけた改革者、讚美歌を歌うことを全く認めなかった偏狭な教会指導者といわれてきた。しかし、事実は違う。彼が作った讚美歌は今も歌われている<sup>11</sup>。

ルター<sup>12</sup>はどうであったか。彼は『卓上語録』の中で「音楽は最大のもの、真に神の贈り物で、それゆえサタンに嫌われるものである。なぜなら音楽

により多くの、大いなる誘惑は撃退されるからである。音楽が奏せられるところには、悪魔は現れない。」<sup>13</sup>「サタンは悲しみの霊であり、いかなる喜びも我慢できない。それゆえ音楽から遠くに離れ（とくに讚美歌が歌われるときには近寄らない）。このように（サタンに苦しめられるとき豎琴を奏でて）ダビデもサウルの試誘を和らげている（サムエル記上16章23節）。ルターの讚美歌への言葉は尽きることがない。今にしてそれらを省察するとき、こころは燃える。彼は「音楽は神の最高の賜物である。魅了されて、説教したくなるほど心は燃え上がる。聖アウグスティヌスはこれによって良心に目覚めたのである。彼が音楽に喜びをみつけたとき、自らの罪を深く実感したのである」<sup>14</sup>と語った。

ジャン・カルヴァン<sup>15</sup>は詩篇歌だけが、礼拝で歌われるに相応しい「讚美歌」だと考えた。今日聖ベネディクトが書いた、『聖ベネディクトの戒律』<sup>16</sup>を読むと、詩篇歌が重んじられていることに驚く。例えば、第9章に、夜間の時課で唱える詩篇の数について、1項から4項で次のように規定している。

### 第九章 夜間の時課で唱える詩編の数について<sup>17</sup>

1 前記の冬の季節には、先ず三度「主よ、わたしの唇を開いてください。そうしたなら、あなたの賛美を唱えましょう」*Domine, labia mea aperies, et os meum adnuntiabit laudem tuam.* (詩五〇[五一]・一七)と歌います。2 この後は詩篇三とグロリア 3 それに続いて詩編九四[九五]を交唱と一緒に唱え、あるいは少なくとも直唱し、4 次にアンプロシオ賛歌、その後で六つの詩編をそれぞれの交唱とともに唱えます。

この書を翻訳された、古田暁氏は、ベネディクトが詩篇93編を「新し



い歌を主に向かって歌え」という言葉で始まることから、祈祷への招きとして最初に唱えることを求めていると解説している。また3項の「交唱」について、当時の詩篇共唱は、一人あるいは二人の歌唱者が詩篇を歌い<sup>18</sup>、この共唱に対して、共同体が応唱した。それがここでいう交唱である。ベネディクト修道会では、もっぱら詩篇を時課に沿って歌う生活をした。カルヴァンの詩篇歌偏重はこのベネディクト修道院の規則に沿った詩篇集中の習慣と関係があるように見える。この点は今後の研究を待つほかはないが、ともあれ、カルヴァンは詩篇に音符をつけたものだけが「讚美歌」であると主張した。

こうして見てくると、宗教改革者は何れも、司祭が独占する典礼聖歌を廃止して、会衆「讚美歌」の編纂につとめている。これはなぜだろうか。推測するところ、それは、イエスの賛美のあり方とそのイエスを継承した原始エルサレム教会のあり方にあるのではないだろうか。

## イエスに始まる奉献歌

イエスが神への賛美を民衆と共に歌われた聖書の記述は、現在に生きるわたしたちにも、慰めと満ち溢れた祝福を伝えてくれる。イエスが五千人の群衆に食べ物を与えられた物語は、4福音書のすべてに記述されている。(マルコ6章30-44節、ルカ9章10-17節、ヨハネ6章1-13節)それぞれの記述は編集史的に共通していることがわかる。それを根拠づける五つの要素はいずれの福音書においても一致している。それを取り出すと以下のようになる。

- 1 五つのパンと二匹の魚を取り
- 2 天を仰いで賛美の祈りを唱え
- 3 パンを裂いて

- 4 弟子たちにお渡しになった
- 5 弟子たちは群衆に与えた（配らせた）

以上のイエスの行為の平行記事は、四千人の給食の記述にも確認することができる。この福音書記者それぞれの編集の視点から観ると、4人の福音書記者が言おうとしている意図が明らかに現れて来る。それは次の二点である。第一に、この給食の行為は、イエスの「最後の晩餐」の出来事を先取りしていることである。第二に、「給食物語」と「最後の晩餐」におけるイエスの所作がどこから来るのか、ということである。それはユダヤ教の家庭でなされる過越祭の式文である「ペサハ・ハガータ」の伝統に源を持っている。この二点からイエスにおける「奉献賛歌の誕生」がもたらされるのではないだろうか。先ず、「過越伝承」に関して、加納政弘氏は『過越伝承の研究』の中で以下のように論述している<sup>19</sup>。

旧約聖書において明らかにされた過越伝承の性格や構造はユダヤ教に至っても基本的には変わらなかった。何よりも過越の儀式とその解明の言葉の生きた結びつきは、後述する如くミシュナ・ペサヒーム及びペサハ・ハガータに結晶している。この旧約聖書からユダヤ教へと過越伝承を形成発展せしめている主要な要因は、この伝承が保持する独特な性格にある。第一に、この祝いの挙行を意味づけている出エジプトの救いの出来事である。これはイスラエル民族のその後の運命を決定づけるような出来事、即ちイスラエルの共同体の誕生の出来事であった。それ故この祝いがイスラエルの歴史における劃期的な出来事に結びついて挙行された事実も決して偶然なことではなかった（出一一五章、ヨシ三一五章、列王下二二―二三章、歴代下三〇、三五章、エズ六章参照）。第二は、過越の祝いは家族・部族を核とし、社会生活に密着した共同体的祭儀である。第三に、祝いを構成する諸要素が

神的權威の下に極めて保守的に伝承されている。過越伝承の持つこうした性格や構造は時代の激しい変動にも拘わらず、一面において頑固に継承された。これは儀式的固定的、保守的性格に依ることは確かである。他面において、特に祝いに常に想起され、告白される出エジプトの救いの物語は、時代の激動に柔軟に即応し、その度に意義深く解明、注釈されていった。<sup>20</sup>

ユダヤの家庭で家長が執り行うベサハ・ハガータの礼拝式は出エジプトを記念して厳かに行なわれる。イエスもユダヤ人として、父ヨセフの執り行うベサハの儀式を守った。ヨセフの死後、イエス自身が父に代わって行なったものと想像される。式が進む中で、家長が「種入れぬパンを取り上げる」時、出エジプト記12章39節が朗読される。つづいて「苦菜をとりあげる」時、出エジプト記1章14節、13章8節、6章23節が読まれる。その後、「酒杯を取り上げる」ことがなされ感謝と賛美と褒め、讃えることと賞賛と賞揚がなされる。家長はこのとき、「さればわれら主の前に新しき歌、ハレルヤをいわん」と宣言し、ハレルヤの朗唱を行なう（詩篇113編、114編）。つづいて贖いの祝福がなされ、「ここで酒杯をとりあげて賛美する」ことが行なわれる。この過越の会食の儀式では、「われらの主なる汝の御名を感謝し、詠め、讃え、賛美し、ほめ歌い、崇め、聖とし主と仰ぐ」と歌いつつ「種入れぬパン」を高く挙げ、これを裂き祝福する。イエスが群衆に食事を分け与えられたとき、過越の食事の儀礼に従ってパンと魚を準備され、その食卓に最も貧しく、蔑まれていた極貧の群れを招かれた。その際、最も美しいことは、イエスご自身が神への賛美の歌を歌われたことである。

## 「最後の晩餐」における賛美

受難週の聖木曜日、イエスが弟子たちとされた「最後の晩餐」が果たして「過越の食事」であったかどうかについては、それを14の根拠を挙げて主張するドイツの新約学者のヨアヒム・エレミアスと多くの神学者との間で論争がなされてきたが、一致した結論は得られていない。共観福音書の中でも、マルコとマタイは、イエスがパンをおとりになり、それを賛美（ギリシャ語では「エウロゲイン」）し、ぶどう酒は感謝し（ギリシャ語では「エウカリスティン」）と記述している。ルカはパンを取り、感謝し、ぶどう酒の入った器を取り挙げ、同じように感謝したと書いている。しかし、ルカは9章16節では新共同訳聖書によると、「賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡して群衆に配られた。」と報告している。ここを無教会の聖書学者の岩隈直氏は「天を仰いで祝福し」と訳している<sup>21</sup>。

ルカはさらに、24章13節以下が物語る「エマオで現れる」の箇所では、30・31節で「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」（新共同訳）と書いている。「パンについては賛美がなされ、ぶどう酒については感謝とするマルコの叙述のほうがより正確である」との解釈もあるが<sup>22</sup>必ずしもそのようには断定できない。ギリシャ語の「エウロゲオー」は賛歌を歌いつつ「祝福する」行為であり、「エウカリスティン」、すなわち「感謝する」と言う行為も賛美を歌う祝福の儀礼であったと思われる。イエスはもとより、神を賛美するユダヤ人たちは、伝統を重んじる食事の際、パンとぶどう酒の杯を取り、「ベラカー」、すなわち、賛美をささげたのである。イエスの行なわれた晩餐は、賛美をともなった食事だった。その最後も「一同は賛美の歌をうたってからオリブ山へでかけた。」とあるように、賛美で夕べの食事の宴は閉じられた（マタイによる福音書26章26-30節）。

## イエスの賛美は自己譲与の讚美歌

イエスはご自身の体を献げる時、賛美の歌を歌われた可能性がある。ユダヤ人は過越祭を、モーセの時代の祭儀と基本的に変えることなく、忠実に継承している。ゲリジム山で行なわれるサマリア人の過越祭も、エルサレムの神殿で行なわれる過越祭も、讚美歌を伴って進められる。ペサハ・ハガータといわれる家庭で行なわれる過越祭でも、式が進むにしたがって、種入れぬパンを取り出し、苦菜を食べ、過越の食事を終え、司式者の家長が「いざわれら祝福を唱えん」と声を発し、やがて、ハレルヤ賛歌が繰り返され、歌による祝福「キルカ・ハッシール」が歌われる。これは大合唱である。イエスの晩餐はまさにユダヤ教の過越祭を受け継ぎ、これらの伝統にイエスは従った、と考えるのはまことに自然である。弟子たちもその際、賛歌を賛美した。イエスはやがて、十字架において、活けるまことの体なるパン（ヨハネによる福音書6章）として、活けるまことの血として、自己を与えつくす食事の儀礼を、賛美をしつつ行なわれた。まさに、「イエスによる、イエスを奉獻する賛美」を歌いつつ、聖餐が行なわれたのである。それは、これまでの古い過越祭の終わりであり、キリスト自身が過越の「犠牲」として、自己を神に譲り渡すことを歌う、新しい自己奉獻の、また自己譲与の「讚美歌」の誕生の瞬間であった。

## キリストの体なる教会のキリスト賛歌と出来事性

キリストの共同体といわれる教会の中での賛歌は、キリスト賛歌であり、それ以上でもそれ以下でもなく、そのものである。またそうあるべきである。もちろん、さらに三位一体の神であるから、キリストを賛美することは即神を賛美することであり、聖霊を賛美することである。けれども、もしもそこに、人間の業績や徳、あるいは人間の真善美の要素がすこしでも

入り込むならば、そのような歌は、偶像を礼拝する歌に置き換えられていることになるのである。そのことは、福音主義の信仰告白に基づいて、讃美歌を作る努力を命がけで行なった、あの宗教改革者たちの精神と信仰を踏みにじることに他ならない。

「讃美歌」を極めて厳密に定義づけるために、キリストの「出来事性」について考えなければならない。このことを考察する上で参考となるのは、神学者加藤常昭氏の『説教黙想集成』（教文館）において述べられている神学的考察である。氏は「出来事としてのイエス・キリストの歴史と宣教のことば」について、以下のように語る。

「宣べ伝えるということは、一つの出来事である、ということがしっかりと把握されることを求める。それは、キリストの聴き手との間に起こる出来事である、宣教の言葉は、既に起こった出来事の証言であるのと同じように、今ここにおける出来事であるのである。宣教はイエス・キリストの歴史的出来事の証言である。まさしく宣教の言葉の証言において、イエス・キリストの歴史的実事が、今ここにおいてわれわれにとって同時的な出来事となる。」<sup>23</sup>

氏が主張される説教における「出来事」は讃美歌を歌うときにも、あの三位一体の神の顕現が、キリストの約束の言葉の実現として、まさに、「起こる」のである。すなわち讃美歌を歌う時、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」とのイエスのことばの約束が、神の「出来事」として成就するのである。

以上、加藤常昭氏は、神の言葉の解き明かしにより、キリストが活ける主として顕現すると言われる。そして、その活けるキリストとの出会いが説教に与えられている宣教の課題であると述べている。この「出来事」の神学を持って「讃美歌」をみる時、「讃美歌」もまた説教と同じ宣教の課題を与えられているという、新たな次元が開かれることになるのではないか。

教会史の中で、キリストに倣う生き方を貫いた人たちが、日本のキリシタン殉教者の群れにもみられる。彼らの殉教の瞬間こそまさに、自己奉獻の瞬間であり、神賛美の誕生の瞬間でもあった。そしてその死は強烈な宣教の働きをなした。

例を挙げよう。長崎のキリシタン、ミカエル薬屋と、名説教家にしてイエズス会修道士のニコラオ福永ケイアンが、1633年7月28日に火炙りの処刑を受けた。刑場への道でミカエル薬屋は、「すべての国よ、神をたたえ、すべての民よ、神をほめよ」と賛美を始めた。すると、彼の友や見物に集まっていた群衆もが、彼と一つになって歌い始め、町中が賛美をする有様となった。皆泣いていた。彼はカリタスの奉仕者団に属し長崎の興善町で、捕らえられていたキリシタン貧者たちを、彼の薬を持って助け、孤児たちを救済し、ハンセン病者の世話をした。彼を深く愛し尊敬していた群衆は、燃え盛る炎の中から、「一番貴いのは愛です」という、彼の最後の声を聞いたといわれる。彼の命の最後の歌と最後の言葉は、神を讃える「讚美歌」の誕生の瞬間を証するものとなった。日本の歴史に彼らのような殉教者が存在したことは大いなる慰めである<sup>24</sup>。ミカエル薬屋の最後の賛美はまさにキリストの「出来事」そのものであり、宣教の証となったのである。

讚美歌を歌う時、ひとりという極限の孤独の中で歌うのではなく、イエスが共に臨在し、聖霊とともに歌っておられる出来事の中で、いわば共に歌ってくださっているイエスと共に歌うことなのである。ローマ人への手紙8章18-30節を読む時、私たちは孤独の状態に放置されていないことが分かる。讚美歌の詠唱に孤独とか孤立ということはない。聖霊がいついかなる状況においても、「共に」おられ、共に苦しみ、助けてくださり、そして、共に賛美してくださる。

## おわりに

カルヴァン派の神学者ヴィルヘルム・ニーゼルは、彼の『教会の改革と形成』（渡辺信夫訳、新教出版社）の中で、キリストの名称を用いている教会は数多あるが、イエス・キリストの不在の教会もある。従って、教会は絶えず「改革されなければならない」と書いている。「讃美歌」をめぐることも同じことがいえる。讃美歌を用いるキリスト教会や学校教育機関は多くあるが、果たしてそれが真実の「讃美歌」であるかどうかは問われなければならない。

多様な音楽表現形式の賛美が、キリストの名を持つ建物の中で歌われる時代の中で、賛美が生まれ、用いられることは否定されるべきではない。しかし、自分の感情に陶醉し、自己憐憫と安価な神の愛を歌う感情歌が溢れているのも事実である。作られた歌が「讃美歌」といえるかどうかは、主観的な判断によるのではなく、聖書の正典化の過程と似たところがあるのではないだろうか。すなわち、教会の歴史的信条や信仰告白に準拠し、キリストの贖罪信仰を歌い、主なる神への喜びと溢れる慰めを歌い、人格を高め、自分が他者のため何をなし、どのように生きるべきかを歌うものでなければならない。もう一つ重要なことは、その歌がどの程度純度高く、「キリストの出来事」を歌っているか、ということである。「讃美歌」が回心を起こしたようなアウグスティヌスのごとく、「讃美歌」といわれるに相応しい歌は、人がどのような職業を選択すべきか、というような、その人の生き方を問い、積極的な生き方を促すという、極めて実践的な力を持つものなのである。

良き「讃美歌」を継承し、さらに新しいキリスト賛歌を生み出すことが、次世代へのわれわれの使命である。



注

- 1 使徒言行録16章25節「真夜中ころ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると」
- 2 フィリピの信徒への手紙2章6-8節  
キリストは、神の身分でありながら、  
神と等しい者であることに固執しようとは思わず、  
かえって自分を無にして、僕の身分になり、  
人間と同じ者になりました。  
人間の姿で現れ、  
へりくだって、死に至るまで、  
それも十字架の死に至るまで従順でした。
- 3 『告白録(下)』(宮谷宣史訳)『アウグスティヌス著作集』5/II (教文館, 2007年) 所収, 42頁。
- 4 同書, 431頁。
- 5 アンブロシウス (Ambrosius 339頃-397) ミラノ司教 (在位374-397), 西方4大博士の一人。旧約聖書の注解書を多く書いた。アンブロシウス典礼はミラノの典礼を知る上で重要である。
- 6 十時正子「アンブロシウス」(大貫隆, 名取四郎, 宮本久雄, 百瀬文見編集)『岩波キリスト教辞典』(岩波書店, 2002年) 所収, 65頁から引用。
- 7 家入敏光『聖アンブロシウスの讃歌』(サンパウロ, 2002年), 29-31頁。
- 8 同書, 29-30頁。
- 9 同上。
- 10 Urrich Zwingli (1484-1531)
- 11 Markus Jenny, LUTHER, ZWINGLI, CALVIN, IN IHREN LIEDERN, Theologischer Verlag Zürich, 1983, Seite 175ff.  
例えば, Das Pestlied は彼がペストで一命を取り留めた時, 神への感謝の歌として作ったものである。その他, Das Kappeler Lied や詩篇歌の Der 9. Psalm などがある。
- 12 Martin Luther (1483-1546), ルターこそ福音主義神学の立場から「会衆讃美歌」を制作した〈讃美歌の父〉である。アウグスティヌス会修道院アントヴェルペナー (Antwerpener) の二人の若い修道士が1523年に, 福音主義信仰を受け入れ,

異端者としてブルッセルのマルクトプラッツで焚殺された知らせを受け取り、彼らを記念して、“Das walt Gotte, unser Herr”を作っている。

- 13 M・ルター『卓上語録』（植田兼義訳）（教文館，2003年），376頁。
- 14 同書同頁。
- 15 Jan Calvin（1509-1564）
- 16 『聖ベネディクトの戒律』（古田暁訳）（すえもりブックス，2000年），77頁。
- 17 同書同頁。
- 18 同上。
- 19 加納政弘『過越伝承の研究』（創文社，1971年）
- 20 同書，46頁。
- 21 『新約聖書3ルカ福音書下』（岩隈直訳註）（山本書店，1991年第二版）
- 22 国井健宏『ミサを祝う』（オリエンズ宗教研究所，2009年），34頁。
- 23 『説教黙想集成1序論・旧約聖書』（加藤常昭編訳）（教文館，2008年），103頁。
- 24 『恵みの風に帆をはって』（「まるちれす」編纂委員会編著）（ドン・ボスコ社，2008年），112頁以下。